

◆ 2016年11月9日発行ラインナップ

- ・ 作況指数103 15年ぶりの良作指数
- ・ 9月の多雨、日照不足の影響で

秋野菜価格が高騰

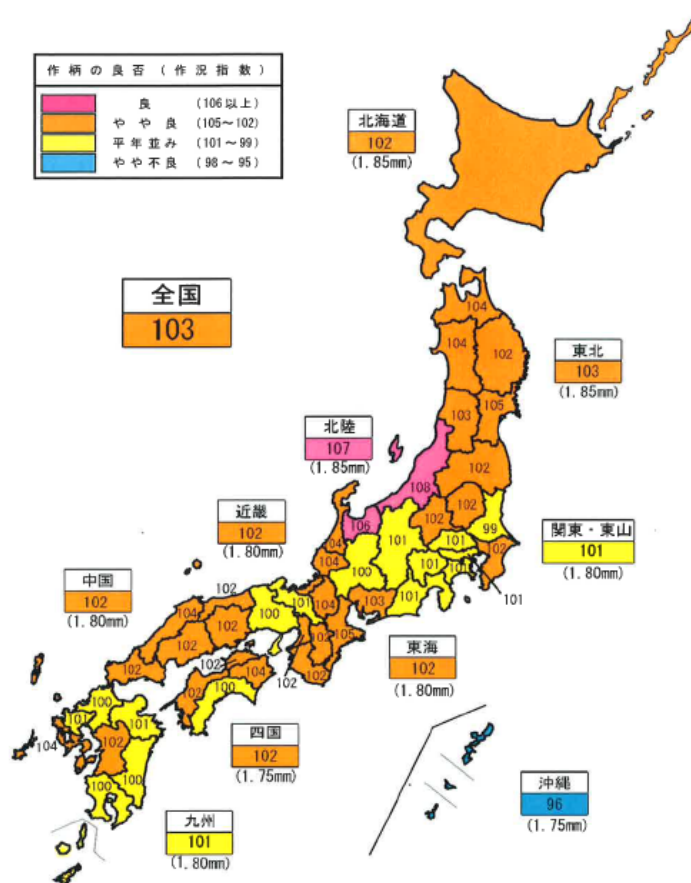
作況指数『103』15年ぶりの良作指数

農水省大臣官房統計部は10月15日現在の主食用米の作況指数を発表した。9月15日発表に引き続き作況指数は「103」とされこの数値は平成13年度以来の高い値となっている。平成28年度の全国予想平均反収は544kg（9月15日発表反収は545kgで△1kgに下方修正）、予想収穫量（主食用）収穫量は749万8,000トンと推計された。全国では前年産に比べて反収で13kg、5万6,000tの増加が見込まれる計算となる。また、地域的に見ると前年産との比較では主産地の北海道が△8kg、東北は△3kgと反収を下回ったもののほか産地が好成績であったためだ。（ただし、北海道・東北ともに作況指数は102、103）残念ながら沖縄のみ「やや不良」の作況指数は96と天候に泣かされたのだが、平均反収が36kg増となった北陸地方は移植から順調に天気に恵まれたため、新潟では108の「良」、富山でも106の豊作指数となった。ふり目幅別重量分布状況については多くの地域別において1.85mm以上の玄米の重量割合は直近5か年平均値に比べて高くなっている。今年は台風の上陸が相次ぎ、また多雨となり生育後半は天候不順となってしまったために秋野菜は品不足で高値が続いているものの、コメにおいては比較的低位格で推移していた一部の業務用筋に人気がある銘柄を除いては需要面から見て品不足となる心配にはならない状況となっている。

都道府県別超過作付の状況 新潟と大消費地近郊県で依然超過傾向

農水省は9月30日に都道府県別の超過作付の状況を報告している。28年度産の主食用米の超過作付面積は△2.2万haとなり、昨年に引き続き生産数量目標及び自主的取組値を下回った。生産数量目標を下回った県は36都府県、自主的取組参考値まで下回ったのは31都道府県となった。一方で超過作付のワースト1位は千葉県(8,318ha)、2位は新潟県(4,424ha)、3位は茨城県(3,502ha)となっている。その他の生産数量目標から見た作付超過県としては高知・長野・奈良・埼玉・愛知・神奈川・大阪・静岡となった。新潟、長野、高知以外は消費地に隣接または在する府県となっている特徴が伺える。国や自治体が戦略作物等で生産調整に躍起となって取り組んでいるのにも関わらず、千葉・新潟・茨城のトップ3は他よりもずば抜けて超過面積が高い。ニーズが生む産物なのだろうが、独自販売ルートを持っている所以なのであろうか、次年度の国と自治体の動きに注目したい。

全国農業地域・都道府県別作況指数（10月15日現在）
【農家等が使用しているふり目幅ベース】



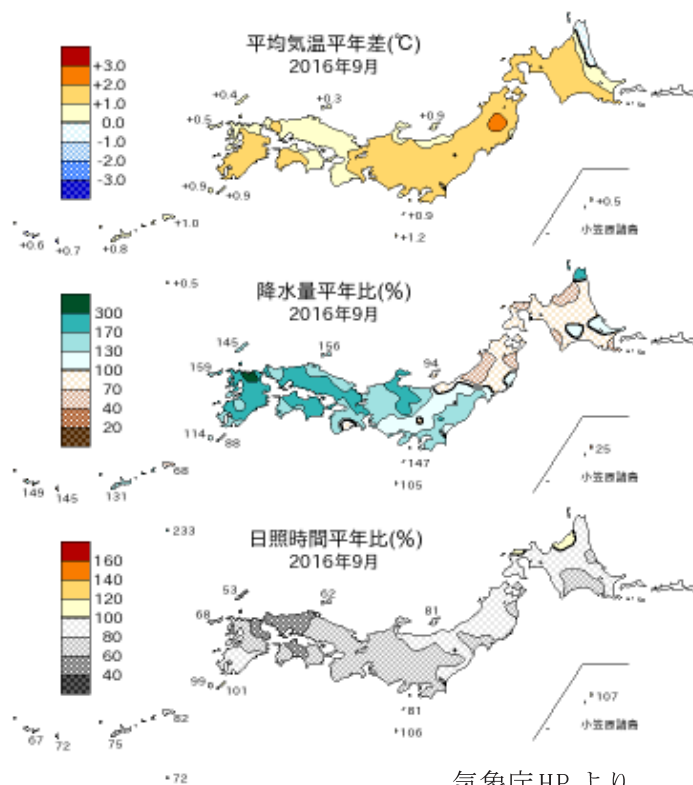
注：1 作況指数は、各全国農業地域に所在する農家等が使用しているふり目幅について、その日幅が大きいものから数えて9割を占めるまでのふり目の目幅（北海道、東北及び北陸は1.85mm、関東・東山、近畿、中国及び九州は1.80mm、四国及び沖縄は1.75mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

2 徳島県、高知県、宮崎県及び鹿児島県の作況指数は早期栽培、普通期栽培を合算したものである。また、沖縄県の第二期稲は未確定の要素が多いことから、沖縄県計の作況指数の算出には、第一期稲の10a当たり収量と第二期稲の10a当たり平均収量を用いた。

9月の多雨・日照不足の影響で秋野菜価格が高騰

実りの秋本番を迎えて久しいが、農産物価格が高値をつけている。春は少雨で水不足が懸念されたが夏以降は一転雨ばかり。台風が去って、また来たる。これまでの台風の歴史をさかのぼっても、今年のような台風シーズン入りが遅れ、その後の上陸ラッシュ、というような年は前例になく岩手や北海道を襲った台風や集中豪雨は記憶に新しい。10月も中旬頃までは半そで1枚でも暑いと思われる日々が続いたのだが、中旬以降はめっきりと冷え込んで急に秋本番の天候となり体調管理が難しかったのではないかと。9月は温度が高かったものの、全国的に多雨と日照不足であったことは下の図表を見て頂くとよく分かる。

東京は晴れ間が2日しかなかった。この多雨と日照不足によって作柄と収穫に影響が出ている。まず、秋に播種する露地作物では播種ものは蒔き直しや初期生育不良といった声が各産地から聞こえてきている。苗を定植する定植結球野菜は活着時期の降雨により畑に入れず定植が遅れたため、キャベツにおいては10月中旬頃から例年よりも1玉100円以上高値がつけられている。施設野菜の果菜類は日照不足による着果不足、軟弱葉物では降雨による発芽不良で作柄に影響が出ている。八百屋の品ぞろえを見ると一目瞭然だ。北海道が主産地である大根や人参、ジャガイモの販売価格は軒並み上昇している。ジャガイモやタマネギは小玉傾向で人参は先が細く芯詰まりの良品があまり並んでいないようにみられる。ジャガイモについては来春の作付分の種イモが十分に確保されるかどうか懸念の声が聞こえてきた。8～9月の貿易統計結果によると特に台風で被害が大きかった北海道の農産品の品目が海外産に置き換わっているようだ。国産人参とタマネギがそれで、人参の輸入国はほぼ中国で8月は前年同月比29%増の7,342トン、9月は前年度同月比26%増の9,868tとなっている。タマネギの輸入国もほぼ中国となっており、8月の輸入量は前年同月比9%増の2万5,147トンとなっている。一般的に国産品が品薄であるのと為替の影響で輸出側にメリットがあれば海外産のものが増加し市場価格は弱まる傾向となる。年度比較で見ると、両農産品ともに年間の輸入量では前年度より実績は下回っており1～5月までのCIF価格が影響しているものと思われる。ただし、一部の激寒期の国産レタスは近年作柄や品質が安定しないことから主に台湾産のものがシェアを伸ばしている例もあり、日本の生産者は輸入野菜の動向にも注意して作付を吟味する時代になっている。輸入野菜はともかく、秋野菜の価格が落ち着くのは11月中旬以降とのことだが、鍋物が恋しい季節に入り、野菜の価格高騰は消費者にとって頭の痛い話だ。



国産人参とタマネギがそれで、人参の輸入国はほぼ中国で8月は前年同月比29%増の7,342トン、9月は前年度同月比26%増の9,868tとなっている。タマネギの輸入国もほぼ中国となっており、8月の輸入量は前年同月比9%増の2万5,147トンとなっている。一般的に国産品が品薄であるのと為替の影響で輸出側にメリットがあれば海外産のものが増加し市場価格は弱まる傾向となる。年度比較で見ると、両農産品ともに年間の輸入量では前年度より実績は下回っており1～5月までのCIF価格が影響しているものと思われる。ただし、一部の激寒期の国産レタスは近年作柄や品質が安定しないことから主に台湾産のものがシェアを伸ばしている例もあり、日本の生産者は輸入野菜の動向にも注意して作付を吟味する時代になっている。輸入野菜はともかく、秋野菜の価格が落ち着くのは11月中旬以降とのことだが、鍋物が恋しい季節に入り、野菜の価格高騰は消費者にとって頭の痛い話だ。

【秋の叙勲】当社特約店トモエ商事株式会社（青森県）社長澁谷光弘様が、県産米評価向上への功績が称えられ旭日双光章を受勲されました。ここにその功績を称え心よりお祝い申し上げます。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>